

書 評

梯 明 秀 著 『経済哲学原理』

山 中 隆 次

一

太平ムードで一杯なのに、マルクスの『資本論』は飛ぶように売れ行きだそうである。これはいったいどう理解したらよいのだろうか。もうじき『資本論』出版一〇〇年祭がやってくる（『資本論』第一巻初版は一八六七年に出版された）。

おそらくマツリの好きな日本人のことだから、福祉国家のものとで、大々的な資本論祭りがくりひろげられることだろう。いや、そのハシリは出版界等に、もうあらわれている。しかし『資本論』出版一〇〇年を祝って、われわれに何か御利益でもあるのだろうか。いくらでも生活は楽になるのだろうか。どんな祭りをやるのか知らないが、正直な話、あまりお

祭りさわぎはやつてもらいたくない。一〇〇年も経つのに、まだこんなところか、とマルクスにおこられそうなのがしてたまらない。それにしても、『資本論』の売れ行きは大したものらしい。買っていったい、どんな読み方をしているのか、ちょっと余計な心配もしてみたくなるほどだが、しかし、「学生時代には、『資本論』の一冊ぐらい読んでおいた方が、いいのでしょうか」と、最近の学生から質問を受けるとなると、そんな心配もけっして余計なものとはいえない。こんな質問を受けたとき、最初は相当なショックだった。「読む必要はない」と、いささかむっとして答えたが、最近はいぶ馴れて、こちらもニヤニヤしながら「読んでおいた方が、いいだろうね」と答えることにしている。そのせいで『資本論』の

売れ行きも良いのだろうが、それにしても困った話である。

「論語読みの論語知らず」という言葉があるが、『資本論』はけっして「読んでおいた方がよい」という形で読まれる書物ではない。そういう読み方は、『資本論』にたいする冒瀆であるばかりでなく、『資本論』から相当のシッペン返しを受けることであらう。『資本論』と限らず、古典といわれるものは、それほどの偉力をもっている。といって、なにも『資本論』にしりごみする必要はない。要は、たんに知識や教養としてでなく、もっと主体的に『資本論』を読んでもらいたい、ということである。そしてそのことを教えてくれるのが本書、梯明秀教授の名著『経済哲学原理』である。

本書については、出版当時すでに、数多くの書評紙や学生新聞で、また本学会誌でも梯教授還暦記念特集号として出版された第十一巻第五・六号で、平井俊彦氏によってとりあげられている。いずれも簡にして要を得た紹介、論評であるので、今回本誌編集者の一人から本書の書評を依頼されたとき、いまさらの感なきにしもあらずであった。しかし、さきにくれた最近の学生状況を見るにつけ、このさいあらためて本書をとりあげることも、あながち無意味ではないと判断し、

浅学をかえりみず、ここにあって筆をとった次第である。

(1) 発表された新聞の日付順序にしたがって

- (イ) 田中吉六氏（『図書新聞』昭和三八年二月二三日号）
- (ロ) 清水正徳氏（『週刊読書人』昭和三八年三月四日号）
- (ハ) 花田圭介氏（『日本読書新聞』昭和三八年四月二二日号）

(ニ) 元浜清海氏（『京都大学新聞』昭和三九年一月一三日号）  
などがある。

## 二

ところで、さきに私は、『資本論』を主体的に読め、といった。それは具体的に『資本論』に即していうと、どういうことであらうか。それを最初に教えてくれるのが、本書の第一篇、とくに第二章「マルクス主義経済哲学の成立の必然性」である。『資本論』がひとつの学問体系をなしているのだとすれば、そうさせている何かがあるはずだ。それが「端緒」(Anfang)というものであるが、それならば、それは資本論冒頭の商品であらうか。たしかに叙述上そうなっている。しかし、それはいかなる意味で、またどういう商品で

あろうか。たしかにレーニンもいつているように、資本制生産の第一の特徴は、商品生産の普遍化である。しかしまた第二の特徴として、労働力の商品化をあげていることを、われわれは見おとしてはならない。そして、この労働そのもの、人間労働力の商品化こそが、これまでの社会形態では例外的、偶然的にしかみられなかった商品生産を、資本制社会において一般化したのである。要するに、『資本論』を体系たらしている原理的根拠（＝端緒）として、『資本論』の冒頭におかれた商品は、資本制社会において人間的生活をなすいうためには、商品として自己の労働力を売り且つ疎外されてなければならぬという賃労働者の自己矛盾的構造、この「人間商品」化の構造を对象的に定立したものである。商品なのである。だから、それは、たんに資本制社会の生産物は一般的に商品だから、という単純な意味で、『資本論』の冒頭におかれた商品なのではない。そのようにみるのは、客観主義的解釈であって、われわれはもっとこのさい、『資本論』がマルクスによって、なんのために書かれたのかを、想起すべきだ。『資本論』はプロレタリアートの立場から、賃労働者の階級的自覚をうながすために書かれたのであり、この実践的

直観を出発点として、マルクスはイギリス古典経済学の成果を批判的に摂取しつつ下向し、この「人間商品」の自己矛盾的構造の对象的表現としての商品範疇に到達した。つまり下向そのものがすでに目的論的であり、したがって到達した「商品」範疇も、たんなる生産物としての商品でなく、「人間商品」の自己矛盾解決の運動を潜在的に内包している商品であり、その意味ではヘーゲル弁証法の概念的自己展開を唯物論的に発展・継承したものである。こうして、『資本論』は、さきにもべた意味での商品等々の対象的世界の運動を通じて、はじめは無自覚な賃労働者が階級的に自覚するように上向的に叙述されているのである。この意味で、『資本論』はプロレタリアートの立場と科学性と弁証法の統一として、いわゆるマルクス主義の三源泉の統一として、もう少し詳しくいうならば、プロレタリアートの立場にたちながら、イギリス古典経済学にみられた剰余価値の法則的理解と、ヘーゲル哲学の向自有的論理構造との発展的継承として、うみ出された「経済哲学」にはかならない、と本書はみる。

われわれは、このように『資本論』をたんなる経済科学の書としてでなく、経済「哲学」としてとらえ、『資本論』冒

頭の端緒としての商品を、たんに客体的にでなく、賃労働者の商品化構造の客体的契機としてとらえているところに、本書の主体的特徴をみることができよう。『資本論』の、あるいはマルクス経済学の科学主義化が横行している今日、このような『資本論』の主体的把握の論理的説明を目的とした本書は、非常に有益な解毒剤といえよう。

### 三

ところで、資本制社会において、賃労働者は商品化されているとして、それはどのような論理構造をもっているのだろうか。これが本書第二篇「賃労働者の範疇的把握」の中心テーマであり、また本書のほとんどの紙数をこれにあてているところからみても、この第二篇は本書の核心ともいえるべきものである。本書によれば、『資本論』を体系たらしめている原理的端緒としての、賃労働者の商品化構造は、すでに一八四四年、青年マルクスの思想発酵期における最大傑作『経済学・哲学手稿』においてみられる。もちろん、そこでは労働者の商品化とか人間商品という形で、近代プロレタリアートを奴隷と同一視する面がなかったとはいえない。しかし基

本的には、賃労働者を「自己意識ある・自己活動的な商品」として把握し、賃労働者が資本制社会では、その社会的実在性として商品であると同時に、そこで自己の人間性を自覚する限り、この商品としての実在性を否定せねばならない、このような自己矛盾の構造をもった「人間商品」であること、このような実在性と否定性の統一として、賃労働者の商品構造を『経済学・哲学手稿』はとらえている。そしてとくに、たんなる商品でなく、「自己意識ある」商品として否定性の契機を重視していること、ここに青年マルクスがヘーゲルの向自有的論理を継承した面があらわれており、また、賃労働者が商品化されているとしても、この疎外が自己疎外である点で、奴隷と本質的に異なることも、マルクスは見抜いていた。この自己疎外の論理は青年マルクスがヘーゲルから継承したものであるが、しかしそれは、フョイエルバッハの唯物論の地盤において発展的に継承されたものである。したがって、マルクスの自己疎外の論理の特徴点は、つぎの面によくあらわれる。自己の対象化・外在化として定立される対象が、ヘーゲルのように人間意識の内にてなく、外にあり、したがって、自己に対立するこの対象の克服も、ヘーゲルのように、

対象にたいする意識の止揚とならずに、自然の一部としての人間の生命活動としてあらわれる。マルクスがたんに「自己意識ある」としてでなく、同時に「自己活動的な商品」として、賃労働者をとらえた所以も、ここにある。

以上、本書第二篇は、その第一章「ヘーゲルの自己意識の唯物論化」で、とりあえず、まだ資本制社会において自己疎外におちいっていない本来の生産的労働者、つまり賃労働者の論理構造の本質規定を、このように解明し、つづいて、それが資本制社会において、どのように特殊化、具体化されているかを、つぎの第二、第三、第四章で展開していく。

まず最初は、たんなる商品流通の過程（労働市場）で疎外されている賃労働者の論理構造が、「単なる商品人間」の論理構造として、つぎのように解明される（第二章）。すなわち、そこでは賃労働者は、自己の労働力を商品として売らざるをえない経済的不自由であり、その欲望も、所有欲ないしは貨幣欲として、疎外された欲望とならざるをえないが、しかし、他面、そこで売られているのは人間そのものでなくて、一定時間の使用のみを許す労働力であり、その点で、賃労働

者はこの労働力商品の所有者として、貨幣所有者としての資本家と法的に対等の関係にある。もちろん、ここで賃労働者は商品所有者として法的に自由・平等だといっても、そのことは、商品としての労働力を売らざるをえない経済的不自由を排除するものでなく、したがってこの自由は、あくまでも形式的・観念的、それゆえに法的な自由にすぎない。とはいえ、そこでは法的な人格者として、その経済的不自由であることにたいし批判的立場をとりうる契機が内在している。すなわち向自有的反省の基盤が、ここ労働市場での賃労働者になり、そこに「単なる商品人間」の論理構造を「自己意識ある商品人間」ととらえた意味がある。しかし、このように経済的不自由を自己矛盾として自覚できる場合は、生産的労働としての行為のなかであり、この労働市場では、賃労働者は法的な人格として一応経済的不自由にたいし無関心でありうるし、そこにまた法的自由あるいは「単なる商品人間」の限界がある。

ところが、賃労働者が流通過程から生産過程に入るや、賃労働者はまったく奴隸的な自己疎外におちいるほかない。そこでは、好むと好まざるとにかかわりなく、自己の人間的生

命が喪失させられていることを、その労働生産物において、また労働そのものにおいて、体験させられる。すなわち資本制的生産過程において、賃労働者は、自己の生命活動の実現である労働生産物において、あるいはその生命活動そのものにおいて、自己を喪失するという、自己矛盾の構造をもつ。

それだけに、賃労働者はこの疎外された活動ならびにその対象化としての生産物（とくに生産手段）を、否定さるべき現象としてとらえ、労働を「ベストのように忌み嫌い」、あるいは動物的な生活に追いこまれる。しかし、このような資本にたいする労働者の心理的ないしは生理的抵抗によって、労働者の擁護しようとするものは何か。それをわれわれは考えねばならぬ。これこそ、資本制的生産過程で奪われようとしている人間の本質たる種属的生命なのである。では、ここでいうマルクスの人間的種属生命とはいかなる内容のものであるか。それはヘーゲルの生命観を「徹底せる自然主義」の立場で唯物論化し、人間主体の自然客体にたいする働きかけによる生命的統一の過程を、この人間主体の実践を媒介とする、自然客体の発展過程として、したがって自然自体の自己関係としてとらえたものである。マルクスがその『経済学・哲学

手稿』で、人間は死ぬまいとすれば、自然によってたえず前進を続けねばならない、とのべていることの意味は、このような自然の自己関係としての生命観にはかならない。そしてこれを自覚しているところに、他の生命と異なる人間的生命の無限性があり、したがって人間的種属生命は全自然を対象に、自由に再生産しうるのであり、またそこにおいて、人間の種属の本質が現実的に確認されるのである。しかるに、資本制的生産過程においては、この人間種属の存立根拠である自然が、人間から疎外され、さらに人間種属を現実的に確認する生命活動としての労働が疎外されていることによって、それは人間から種属を疎外し、人間社会の全体性を階級的に分裂させ、それは具体的には、「非労働人間」と「単なる労働人間」の支配服従の階級社会となってあらわれる。こうして、現実には私有財産を所有しないものが、その労働力を商品として売り、疎外された労働をせざるをえないのであるが、以上の「疎外された労働」概念のマルクスによる分析結果は、その逆であることを、つまり疎外された労働人間の自己矛盾が、労働人間の生産物を非労働人間の所有物に転化せしめることを、明らかにした。

以上、本書第二篇第三章は、マルクス『経済学・哲学手稿』中の「疎外された労働」断片にみられる、有名な「疎外された労働」概念の四規定を体系的に関連させつつ分析して、「単なる労働人間」の論理構造を説明し、それが、「単なる商品人間」として流通過程にあらわれている賃労働者の自己疎外の根拠である所以を、最後の結論とする。

こうして、「単なる労働人間」が「単なる商品人間」の根拠である所以（資本制の私有財産制度の概念的把握）があきらかにされたが、この「単なる労働人間」としての賃労働者は、流通過程における「単なる商品人間」の「自己意識ある商品人間」とくらべて、どのような特徴を有しているのだろうか。彼が資本制の生産過程で否応なしに自己矛盾を体験させられるという利点を有していることは、すでに指摘したとおりである。しかもこの労働という生命活動そのものは、この自己矛盾解決の場でもある。しかし他面、そこでは、その生命的自己関係が喪失させられていることによって、この自己矛盾の解決は自覚的でなく、ただ動物的生活を避けて人間的生活を主張する、あるいは、それにたいし生命の抵抗をするという段階にとどまらざるをえない。「単なる労働人間」

が自己意識を欠いた、たんなる「自己活動的な商品人間」である所以が、ここにある。

こうしていまや、「単なる商品人間」と「単なる労働人間」のそれぞれの一面性が止揚され、その相互媒介による自己統一として、現実的な賃労働者の論理構造が、この第二篇の終章（第四章）で明らかにされる。すでにのべたように、現実の賃労働者は、「単なる商品人間」としては、たとえ観念的、形式的とはいえ、労働力という商品の所有者として独立の主体性を有していた。しかしいまや、この賃労働者は、「単なる労働人間」として生産過程に入り、そこで経済的不自由を体験させられることによって、さきの主体性がまったくの仮象にすぎないことを自覚する。しかし、この「単なる労働人間」において生じた自覚は、「単なる商品人間」として保持していた主体性の放棄を意味するものではない。むしろここでは、「単なる労働人間」としての経済的不自由、人間の種属的生命の喪失が自覚されており、それを否定し去らんとする、新しい主体性がうみだされている。それは「単なる商品人間」においてみられた自己意識の契機なくしては不可能である。その意味では、賃労働者が「単なる商品人間」として、

労働市場（流通過程）で保持していた観念的形式的自由は、たんに仮象としてしりぞけられるべきものでなく、むしろ賃労働者が自己の生命、生活の全体を資本家に隷属させていることから解放するための手段として、積極的な条件として、あくまで堅持されなければならないのである。こうして、現実的な賃労働者は、「単なる商品人間」と「単なる労働人間」の相互媒介的自己統一として、その経済的不自由との自己矛盾を自覚しているのであり、これがマルクスのいう「自己意識ある自己活動的な人間商品」の論理構造の具体的内容なのである。したがってそれを発展させれば、賃労働者は、その自己喪失としての資本制生産過程において、自己の生命的無限性、種属の本質を反省し、階級的に自覚し、人類の立場に立つことになり、それは実践的な政治運動となってあらわれる。

#### 四

こうして、『資本論』を体系たらしめている原理的端緒は、マルクスのいわゆる現実の出発点の転化として主体的に把握すべきだという本書の立場、したがって『資本論』冒頭の商

品を、たんなる対象的な商品としてでなく、「人間商品」としての賃労働者の客体的契機として把握すべきだという本書の主張は、この賃労働者の疎外された労働の産物としての商品的実在性のうちに、この疎外性を止揚し、その種属の本質としての人間性を向自的に自己回復する主体的契機をさぐり、そしてここに、これら兩者、実在性と否定性の自己矛盾として「自己意識ある自己活動的な人間商品」という現実的賃労働者の論理構造を説明しえたのである。ところで、この「自己意識ある自己活動的な人間商品」という論理構造をもった現実の賃労働者は、この「人間商品」としての自己矛盾を自覚しており、いふならば、それはヘーゲル『論理学』での、向自有的論理構造である。しかし、学的体系の端緒は、ヘーゲルも主張しているように、あくまでも純粹に直接的なものでなければならぬ。みずからの商品化を自覚している賃労働者の論理構造は、学問的思惟の端緒たりえても、論理的端緒たりえない。といって『資本論』の方法論的端緒を主体的に把握する本書としては、この端緒は、自己運動の推進力としての自己矛盾を、それ自体に蔵しているものでなくてはならぬ。このディレンマを解き、ならぬ媒介性を含まない論理



的端緒を学問的思惟の端緒たらしめる論理を展開し、解明したのが、本書の最後、第三篇「マルクス主義経済哲学原理」の内容である。すなわち本篇は、さしあたり、みずからの商品化を自覚している賃労働者の向自有的論理構造から、自覚的契機を、つまり向自有的否定性の契機を捨象して、向自有的の前段階である定有形態の賃労働者に、すなわち、まだ自己の人間性を、自己に内在する自己矛盾を自覚するに至らない賃労働者にまでさかのぼる。この定有形態にある賃労働者は、定有というカテゴリーが、有と無との統一としての成の運動の成果であるように、ただ一個の商品として労働市場にある未自覚の賃労働者にすぎない。しかし、といって定有において、その内容である成の運動が消滅したわけではない。否、定有は成の自己疎外と解すべきである。とすれば、この定有形態にある賃労働者には、この成をとりもどす、とくに有としての規定を否定しようとする主体的な無の運動の契機が内在しているはずである。この定有的静止のなかで自己運動のための原動力ないしは契機としてあるもの、静中動ともいうべきもの、ここに本篇は、理論的端緒としての未自覚的賃労働者の定有形態が、同時に学問的思惟の端緒たりうる論理

的根拠をみいだす。この定有における静中動は、具体的には、資本制社会の生産過程において、自己の生命活動を自己喪失せざるをえない賃労働者の苦悩としてあらわれる。しかしこの苦悩として、疎外された自己と自己自身との矛盾を感じることとは、そこから、自己本来の人間性を回復しようとする自覚的運動がはじまる最初の直接的契機、そのための端緒となるものではなからうか。

## 五

以上が本書『経済哲学原理』の概要である。もちろん、その内容は、一方で、マルクスの『経済学・哲学手稿』を素材とし、他方では著者梯教授の多年の学問的蓄積であるヘーゲル哲学および西田・田辺哲学の研究成果を駆使されつつ、ここに、マルクス『資本論』を「論理学」として、且つ主体的に把握するマルクス主義的経済哲学の原理が、教授の強靱な思弁力によって、なんらのまやかしも許さず、きめこまかく且つ論理的に展開されているのであって、ヘーゲルおよび西田・田辺哲学にまったくの門外漢である自分としては、本書の書評を引き受けたものの、本書をひもどくにつれ、まったくの

悪戦苦闘、まさに本書の結びにあるように、苦悩する自己を自覚するに至り、はたしてこれで本書の特徴をよく伝ええたか、むしろ、そのきめこまかな論理を見すこし、あるいは牽強附会的に誤解した面が多々あるのではないか、とおそれている。しかしなおここで最後に、私の印象批評をあえてのべ、書評としての体裁をととのえたいと思う。

マルクスの経済学、『資本論』が、マルクスにおける思想と科学の統一であることは、ひとつの常識である。否、常識であったと表現せざるをえないほど、今日その常識が失われ、科学主義が横行し、マルクス経済学の近経化の危険さえみられる時期において、社会科学としての経済学を思想と科学の統一として把握することの重要性を、たんに説教としてでなく、合理的論理的に解明した本書の意義は、はじめに指摘しておいたように、いくら強調しても強調しすぎることはなからう。このような本書の立場は、『資本論』を初期マルクスの『経済学・哲学手稿』との関連で把握させ、そのばあいでも、レーヴィット、マルクーゼらの西欧マルクス研究者の修正主義にたいする批判もさることながら、ソビエト、東欧のマルクス研究者にみられる客観主義的傾向にたいする批判が

強くにじみ出ている（本書序文）。一言でいえば、それは

『資本論』の主體的把握であり、『資本論』が経済哲学としてしか成立しえない根拠の解明であり、それをもっとも端的に示しているのが、『資本論』冒頭の「商品」の矛盾、使用価値と価値の矛盾を、『資本論』第二篇第四章、第五章との関連で、「人間商品」としての賃労働者の自己矛盾の構造ととらえたことである。もちろん、そこでは同時に、初期マルクスの『経済学・哲学手稿』が、著者のヘーゲル哲学にたいする批判的摂取を媒介として活用されており、それはまたそれで、難解な『経済学・哲学手稿』にたいする、われわれの理解をふかめ、その宝庫たる所以を再認識させる面が多い。とくに「種属的生命」概念について、その感が強い。

ところで、問題をもう少しその中味にはいって、資本論を体系たらしめている原理的端緒としての、賃労働者の概念的把握そのもの（本書第二篇）——それは本書の核心でもあった——について、一、二の感想を最後にのべてみたい。卒直にいつて、賃労働者にたいする「人間商品」の自己矛盾の構造という、著者の把握には、著者のいう「単なる商品人間」に重点がおかれすぎている嫌いがある。もちろん、賃労働者

が自己矛盾を自覚する場が、「単なる労働人間」としての生産過程であることは、くりかえし強調されている。しかし、その資本制生産過程において、賃労働者は、自己の生産し、自己の所有に帰すべき生産物が、すべて資本家の私有財産であることに気づくはずだし、そして、このような資本制的私有財産にたいする否定的自己反省の契機は、「単なる商品人間」としての法的自由だから、それはぜひとも確保せねばならないという著者の立言は、これを経済思想的類推をもって表現するならば、リカード派社会主義の段階にあるといえないだろうか。さらに、賃労働者の概念的把握は「単なる商品人間」に重点をおきすぎではないか、といったのは、この意味である。たしかに、マルクス自身における経済理論の生成・発展は、ある意味では、ここでいう法的自由と経済的不自由の両者の関係で象徴される問題をめぐっておこなわれていた、といっても過言ではなからう。しかし、それは経済的不自由を法的自由で自覚させる形ではなからう。たびたびくりかえしてのべてきたように、著者のいう、『資本論』の主体的把握に、私も基本的に賛成である。と同時に、マルクスの自己疎外の論理が、ヘーゲルのそれをフョイエルバッハ

の唯物論の地盤において発展的に継承したものである、という著者の把握にたいしても、私は賛成である。とすれば、賃労働者の自己矛盾は、賃労働者の自覚だけでは解決しえないのではなからうか。主体的唯物論は唯物論的実践論によって裏打ちされねばならない。マルクスは、たしかに偉大な経済哲学者であった。しかし、また、経済哲学者にとどまらなかった。マルクスが『経済学・哲学手稿』以後、何故あれほど多面的に経済学と取り組み、老大な経済資料をあさったか。もちろん、それは彼がたんなる経済学者でなかったからであるが、しかし、マルクスの『論理学』が『資本論』として結実した意味も、われわれは忘れてはならない、と思う。

もっと本書の内容に立ち入って論すべきであったが、浅学のため、はなはだ高踏的な印象批評におわったことを、最後にふかくおわびしたい。

（一九六二年一二月、日本評論新社刊）